鳥取県地域医療支援センター 広報誌

2023 / Summer vol.09

DOCトリ!

鳥取の地域医療を考えるマガジン　ードクトリ！ー

特集1　鳥取県東部エリアで働く
若手医師座談会

特集2　地域医療を守る
DOCトリ!活動日誌

DOCトリ!

第9号　2023年8月発行　鳥取県地域医療支援センター

※本誌掲載の写真、図版、記事などの無断転載を禁じます。

令和6年度鳥取大学医学部医学科受験をお考えの方へ

推薦入試（出願時期：令和5年11月上旬）		一般入試（出願時期：令和6年1月下旬）
併願も可能です！		
緊急医師確保対策奨学金（特別養成枠）	医師養成確保奨学金（地域枠）	臨時特例医師確保対策奨学金（臨時養成枠）
月額 15万円	月額 12万円	月額 15万円
募集人数 6人（予定）※	募集人数 5人以内	募集人数 14人（予定）
入学試験・対象者	入学試験・対象者	入学試験・対象者
鳥取大学医学部医学科学校推薦型選抜Ⅱ（特別養成枠） ・県内高校卒業（見込）者（2浪まで） ・県外高校卒業（見込）者（2浪まで）で鳥取県に縁のある者（本人・保護者等の出生地・本籍地・現住所地等が鳥取県内であること等） ※本枠は受験要件として、予め県への貸付申請（R5.10募集予定）が必要ですのでご留意ください。	**鳥取大学医学部医学科学校推薦型選抜Ⅱ（地域枠）** ・県内高校卒業（見込）者に限る（2浪まで）	**鳥取大学医学部医学科一般選抜（前期日程）（地域枠（鳥取県））** ・出身地、卒業年度、高校の所在地を問わない

入学試験については、鳥取大学にお問い合わせください。

鳥取県医師確保奨学金について

鳥取県では、本県の地域医療に貢献する意思のある鳥取大学医学部等で学ぶ医学生に対して、奨学金の貸付を行っています。この奨学金は無利子であるとともに、県内の医療機関で一定期間勤務することで、その返還が全額免除になる仕組みとなっています。

鳥取大学の入試と連動した奨学金はこちらの3種類で、臨時養成枠には岡山大学の推薦入試と連動した枠（募集人数1名）もあります。

詳細はこちら▶

鳥取県地域医療支援センターについて

鳥取県地域医療支援センターは、鳥取県・鳥取大学医学部附属病院が連携し、鳥取県の地域医療の充実・発展のために2013（平成25）年1月に設置されました。私たちは、鳥取県の医師不足解消のために、地域枠などの医師のキャリア形成支援や医師の地域偏在解消に取り組んでいます。専任医師も勤務しており、皆さまのご相談などを伺っています。

ご相談やお問い合わせはこちらまで

鳥取県の医療・奨学金制度に関すること
鳥取県福祉保健部 健康医療局 医療政策課
〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1丁目220
TEL 0857-26-7195　FAX 0857-21-3048

医師のキャリア形成・相談に関すること
鳥取大学医学部附属病院 鳥取県地域医療支援センター
〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1
TEL 0859-38-7005　FAX 0859-38-7006

とっとりドクター Naviのご登録を受付中!

鳥取県の地域医療に関心をお持ちの全国の高校生・医学生・研修医の皆さまに役立つ県内の医療情報や勤務に関する情報、医師としてのスキルアップに関する情報として、「DOCトリ!」やメールマガジンをお届けします。どなたでもご登録いただけます。

とっとりドクター Navi

登録申込フォーム ▸▸▸
https://www.pref.tottori.lg.jp/273080.htm

※なお、ご登録情報の変更についても、登録申込フォームで承っております。

広報誌名『DOCトリ!』の由来

「DOCTOR」と「鳥取県」を合わせた造語です。
医師の皆さんに、鳥取県で活躍してほしいという願いが込められています。

編集発行　鳥取県地域医療支援センター

〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1（鳥取大学医学部附属病院内）
TEL 0859-38-7005　FAX 0859-38-7006
Eメール t-chiikicen@med.tottori-u.ac.jp
ホームページ https://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/t-chiikicen/

□ 制作／有限会社キーワード　〒680-0051 鳥取県鳥取市若桜町39 ロゴス文化会館1F　TEL 0857-29-4018

「DOCトリ!」のバックナンバーはこちら▶▶▶

鳥取県東部エリアで働く若手医師座談会

座談会シリーズ・第4弾は、鳥取県東部エリアの医療を担う岩美病院、智頭病院、鳥取市佐治町診療所から、5名の若手医師に集まっていただきました。鳥取県の医療に貢献することを志して医師となった彼らは、既にそれぞれの医療機関を牽引する存在です。その奮闘ぶりをご覧いただきながら、地域医療の魅力や意義を感じてみてください！

国民健康保険 智頭病院
内科
神谷　礼先生
かみや　あや

鳥取市出身。2019年自治医科大学医学部医学科卒業。どこまで地域病院で診るか、症例ごとの見極めと紹介のタイミングを模索する日々。院内外の医師に相談しながら知識を深め、患者に寄り添った温かい医療を目指して診療に当たる。

岩美町国民健康保険 岩美病院
内科
田中　宏征先生
たなか　ひろゆき

鳥取市出身。2017年鳥取大学医学部医学科卒業。幅広い知識・対応力を必要とする地域医療の、懐の広さに面白みを感じている。7年目となり、近頃は後輩の相談を受けることも。培った経験と知識を共有し、診療の質の向上に貢献している。

岩美町国民健康保険 岩美病院
内科
永澤　萌先生
えいざわ　もえ

神戸市出身。2019年鳥取大学医学部医学科卒業。学生時代の実習時、病院の待合室で井戸端会議が始まる様子を見て、住民と病院の近しい距離感が心に染みた。病気だけでなく“人をみる”ことを心がけ、内科専門医取得を目指している。

国民健康保険 智頭病院
内科
菅沼　和弘先生
すがぬま　かずひろ

鳥取市出身。2018年自治医科大学医学部医学科卒業。患者の希望や生活背景などを考慮した丁寧な診療がモットー。初診から検査、手術、術後ケアと一貫して治療に携われる消化器外科に魅力を感じ、内視鏡検査や手術の手技を磨いている。

鳥取市 佐治町国民健康保険診療所
医科（内科・小児科）
井上　直也先生
いのうえ　なおや

鳥取市出身。2015年自治医科大学医学部医学科卒業。鳥取市内にある「野の花診療所」院長・徳永進医師の著書を読み、医学の道へ。7年目に循環器専門医、心血管インターベンション認定医を取得。カテーテル治療分野をさらに研鑽中。

患者の声に耳を傾けて求める医療に応えたい

▼井上　僕たちはほぼ同年代で、それぞれが県東部の岩美病院、智頭病院で勤務中、もしくは勤務した経験があります。まずはそういった地域での実践を通して東部エリアの医療ニーズ、そして地域医療のやりがいについて感じていることを教えてください。

▼田中　市中病院と違って、外来での診察、検査、入院治療、退院後のフォローまで全て関われるところにやりがいを感じています。昨年度は後期研修として鳥大病院に勤務、1年ぶりに岩美病院に戻ってきたんですが、僕のことを覚えている患者さんがおられて、しっかり寄り添えていたのかなと実感できてうれしかったです。

▼菅沼　確かに、患者さんの希望をくみ取れるよう十分にコミュニケーションを取ることが大切ですよね。地域医療では高齢、かつ複数の疾患を抱えている患者さんが多いし、それぞれ生活背景が違うから、ガイドラインどおりの治療がなかなかできません。だからこそ、治療をどうコーディネートするのがその患者さんにとって一番いいのか、よく話し合うことが大切で、それも一つのニーズだと感じる日々です。

▼井上　患者さんとのコミュニケーションにおいて何か工夫していることはありますか。

▼菅沼　何でも話してもらえるよう、威圧感を与えないことでしょうか。主体性を持って話してほしいので。

▼永澤　菅沼先生は、いつも患者さんの言葉を待っていますよね。沈黙の時間も耐えて、言葉が出てくるまで待つ姿勢はさすがです。

▼神谷　菅沼先生が言われたように、私もやはり生活背景を踏まえて診療することが多いです。以前、認知症の奥さんを介護をしているから「絶対に入院しない」という高齢男性がおられたんですが、奥さんも同室に入院してもらうことで解決することができました。こんなふうに患者さんの事情に寄り添った対応ができるのは地域病院ならではですね。

▼永澤　私は、看護師、理学・作業療法士、社会福祉士、ケアマネジャーなど病院内外の多職種と連携して、患者さんの入院時から再び在宅生活へスムーズに戻るところまで関われたときにやりがいを感じます。

▼井上　多職種連携は在宅看取りの場面でも大切です。僕の経験でも訪問診療はもちろん、各種在宅サービスを利用しながら患者さんやご家族のご要望に添って看取りができ、ご家族が満足そうにしてくださるとホッとします。

翻弄されたコロナ診療つらい経験を次の糧に

▼井上　この約3年間、COVID-19（以下、コロナ）対応に追われてきました。その間僕は主に智頭病院にいて、院内の感染対策チームが立ち上がってルール設定をし、中等症までを受け入れるベッドを2床用意、

体制を整えていくという流れを見てきました。でも、普段から看護師数がギリギリで、そこにコロナ患者が入ってきて診療するとなったら、病院の診療業務等の回りがかなり悪くなって非常に苦労しました。岩美病院はどんな感じでしたか。

▼永澤　外来での診断から初期治療・投薬という対応が中心でした。うちも普段から看護師不足で、急性期・一般病棟ですらきつい状態だったので、病院としてはコロナ患者の受け入れを継続するのがかなり難しかったですね。医師側としては、当初は主治医制でスタートしたのがチーム制に変わり、1人で抱え込まないで済むようになったのはありがたかったです。

▼神谷　コロナの患者さんだけチーム制で診ていたんですか。

▼永澤　そうです。10日間の療養期間に関しては午前・午後で担当医を決め、引き継ぐ形にしていました。

▼神谷　負担が減るので、それはいいですね。

▼菅沼　僕は岩美病院で、その主治医制・チーム制の両方を経験したんですが、主治医制の時は通常業務に加え土日も診ないといけなかったので、精神的・体力的に相当しんどかった。通常の医療が十分提供できない体制になってまで数例のコロナ患者を受け入れることが本当にいいのか、岩美病院の理念である「町民のいのちと健康と生活を守る」医療に全力を注げているのか、疑問と苦しさを抱えながら診療していました。でも、上の先生方が動いてくださってチーム制になり、個々人の負担が軽くなったのは本当に良かったです。

▼井上　智頭病院がすごく良かったのは、感染対策チームが多職種で構成されていたこと。全ての職種が主体的に取り組んで、業務の簡略化がかなりできていました。だから、感染に向き合うストレスが少し軽減されたのはありがたかったですね。岩美病院で院内体制の構築から参加していた田中先生は、特に困ったことはありましたか。

▼田中　当時コロナに造詣のある人は全くおらず、ゾーニングの知識もない状態でしたから、鳥取県立中央病院のコロナ病棟を見学し、それを岩美病院に落とし込んでいきました。誰も初めてのことで何が正解なのか明確には分からぬまま受け入れ開始となり、不安が大きかったです。

▼神谷　ゾーニングを学びに行って一からつくるなんて大変ですよね。すごい。

▼田中　県立中央病院のゾーニングを動画で撮って病院スタッフと共有したり、本を読んだりしました。

▼井上　ちなみに、コロナ診療をチーム制にしたことで、以後の入院診療全般もチーム制にしようという話に発展しなかったんですか。

▼菅沼　そこまで踏み込んだ提案はできてないです。

▼井上　派遣医師が多い病院なので、若手が力を合わせ新しいことができるといいと思ったんだけど。

▼田中　コロナみたいにある程度対応の決まったものだとチーム制が取りやすいけど、多種多様な疾患について、知識や経験に差があるドクターでチーム制を組むのは難しいかも。ただ、土日とか夜間の当直対応で何かあったときはチーム制のほうがやりやすいですよね。

岩美病院の多職種連携

岩美病院内の医師、看護師、検査技師、地域連携室スタッフ等の多職種が集まり、5類移行後のコロナ診療について協議している様子。治療薬の公費負担が無くなると医療格差が生じやすくなる。それを防ぐ方策や留意点をそれぞれの視点で考え、意見を交わす。コロナとの闘いはまだ終わらない。

限られた資源の中で、貫く患者ファーストの医療

地域医療の守備範囲は？症例に向き合い見極める

▼井上　地域医療はマンパワーや設備・器具などの医療資源が多くありません。そんな中でどこまで自分で対応するのか。また、最近参加した勉強会では「広く浅く」という言葉が出ていました。深いところは専門科にお願いするとして、自分たちの守備範囲をどこまでにするか。それが難しいところですが、年々分かるようになってきました。誰かに教えられたわけではなく、一つ一つの症例から学び、次に生かすという繰り返しですね。

▼神谷　市中の総合病院に紹介するタイミングはいつも悩みます。「専門科でしっかり診てもらいたい」という患者さんもいれば、「地元の智頭病院がいい」という希望もあったりして。それでも紹介が必要だと思ったら、まずは患者さんに提案し、それでも地元でと言われたら先輩・同期、他科の先生に相談したり、市中病院の専門科の先生にご意見を伺ったりしながら診療に生かしています。

▼菅沼　僕も皆さんと同じで、患者さんをどこまで抱えるかが大きな課題です。標準的な治療ができないときに最も悩むんですが、そんなときは患者さんやご家族とよく話し合い、一番求められている方向に持っていけるよう心がけています。大学の先生やこれまでにお世話になった方の中でその疾患に一番明るい先生に、病院を越えて相談させてもらうことも多いです。

▼井上　確かに、伝手を頼って相談しているかもしれない。自分たちで相談先を切り開いていくしかないのかな。

▼菅沼　例えば患者さんを市中病院へ紹介したときは、後日の研修日を利用して紹介先の先生のところへ挨拶に行き、「あのときはこういう検査も出したほうが良かったですか」とか、「予後はどうなっていますか」とフィードバックを頂くようにしています。

▼井上　紹介した患者さんの経過を聞いて学びに変えるなんて素晴らしい！　研修日をそういうふうにも使うんだ。永澤先生は、そういった学びについて心がけていることはありますか。

▼永澤　自己研鑽としてWebの活用が欠かせないです。コロナ禍からオンラインの勉強会・講習会が行われるようになりましたよね。だから、地域の病院でもWebの講習会で学ぶことができるので助かっています。

▼井上　1時間の講演会を聴講するために往復2時間かけて行くのはつらいときがあるから、ぜひこのまま続けてほしいですよね。田中先生は？

▼田中　初期臨床研修を終え3、4年目から地域病院で勤務する我々は、集中治療に慣れていないところがあります。だから、患者さんに集中治療を提案する際、「その後の経過を十分理解した上で説明できているのか」と、いつも苦悩しています。そんな中、昨年は数カ月鳥大病院の救急科で集中治療を経験することができたので、説明するときのニュアンスは少し変わったと思います。

専門研修で強みを磨き、毎日の診療に還元

▼永澤　私は週1回、県立中央病院の消化器内科の研修で、処置の介助、人間ドックの胃カ

メラを担当させてもらっています。また、空き時間には診療の相談をしたり、最近の論文の話を伺ったりしています。

▼田中　僕も週1回、同じく県立中央病院のリウマチ・膠原病内科で研修を行っています。外来の診断治療がメインの科なので、初診外来の紹介患者さんを診察し、検査計画を立てて、その内容を上級医に相談して助言をもらっています。そして、また1〜2週間後の外来でその患者さんをフォローし、経過を確認しています。診断がつかない熱、よく分からない皮疹といった症状の方が地域には結構いらっしゃるんですが、診断基準による画一的な判断ができないという難しさに面白みを感じ、将来を見据えて勉強をしているところです。

▼井上　6年目には鳥大病院の呼吸器・膠原病内科で後期研修をされていましたが、今に生かせていることはありますか。

▼田中　膠原病の勉強は教科書的にしかできないことが多く、「爪の周りが赤い」「皮膚が硬くなっている」といわれても、写真だけではなかなか分かりません。実際の症例を診ることによりそういったところを学べた1年間でした。まだまだ勉強途中ですが、身体所見の微妙な感覚、採血の結果から診断に至るまでの知識や経験が少し深まったかな。

▼菅沼　僕は消化器外科の分野に進もうと思っていて、県立中央病院の消化器外科で隔週、検査や手術手技の経験を積んでいます。前勤務の岩美病院では外科の外来を週1回受け持っており、術後のストーマトラブルや排便コントロールの受診・相談に対応していました。巻き爪などの皮膚トラブルも含め、広い意味での外科処置の経験を積めたのも今に生きています。

▼井上　外科を志しながら内科で勤務されていますが、どうやってモチベーションを保っていますか。

▼菅沼　やはり研修日ですね。今後のことを考えると焦りや不安がありますが、空き時間に腹腔鏡手術のトレーニングボックスで練習したり、自分の手術動画を見て復習したりしています。論文発表などの経験も積んできたいです。

▼井上　僕も循環器科で研修中です。後期研修も心臓カテーテル治療を中心に勉強しました。自分の中では、専門科でやっていることと地域でやっていることが別々というわけではなく、常に総合診療をバックボーンにした視点で見ている気がします。

少し前を歩む先輩として贈る後輩へのメッセージ

▼菅沼　僕は大学生の時ボート部に入っていたんですが、農業用水路をせき止めてボートの練習場をつくる際に地元農家の方に連絡を取ったり、練習場の割り振りのために他大学の顧問の先生と打ち合わせをしたり、立場の違う人の意見を伺いながら、自分の意見も伝えるという経験をしました。対立することもありますが、意見が重なるところを探す作業は医療の現場でも同じ。いろんな人とコミュニケーションを取りながら、力を合わせて1つのことを成し遂げる経験は、将来必ず役立つと思います。

▼井上　そうですね、地域医療の現場では様々な職種の方と協働しますから。

▼神谷　一見遠回りに見えることでも、目の前のこと一つ一つに全力で取り組むことが自分の成長につながると思っていま

病院スタッフに誘われて智頭病院野球部の一員となり、月1回程度試合に出場しているという菅沼先生（左から3人目）。メンバーの職種は看護師、リハビリスタッフ、医療ソーシャルワーカーと様々。「仕事とは違う一面を知ることができ楽しい」という。

一つ一つの症例に全力で臨む

す。鳥取県立厚生病院の呼吸器内科で研修していたとき、結核の患者さんを診たことがあったんですが、まさか智頭病院でも結核を診ることになるとは思いもよらなかった。後々役に立つことって結構あるんですよね。

▼永澤　どんな経験も無駄にはならない。医学のことはもちろん、趣味一つ取ってみても、何かのきっかけで患者さんとコミュニケーションが取りやすくなったり、病院スタッフと和ができたりすることもあるから。内にこもらず、思い切って外に出るのが一番。

▼田中　そうそう。例えば、思い切り遊ぶのもいいことだと思います。それが何であれ、医学以外の知識・経験が増えるし、人とやりとりをする機会が必ずあるからコミュニケーション能力も上がる。大人になっても必要なスキルだから、若いうちに遊びながら身に付けていったらいいと思います。

　それから僕自身の経験なんですが、地域医療の現場で働いていると、既に専門に足を突っ込んでいる同期との差を感じることがあります。でもそれは、「そんなもんだ」と割り切るほうがいい。逆に、市中の大きな病院で働いていると、患者さんが退院した後、自宅でどういう生活を送っているのか、どんなサービスが必要なのかという知識は少なく、その点は地域で働くドクターのほうが経験が豊富。将来地域医療に携わりたい方にそう伝えたいですね。

▼井上　帰った先まで見えるし、なんなら家に乗り込むこともある（笑）。

▼田中　実際に僕が在宅サービスの調整をして、安心して自宅へ帰っていただいた高齢の患者さんもいますから。そこまでしっかり介入できるのがやりがいの一つ。そんな地域医療をこれから多くの後輩の皆さんとやっていけたらいいですね。

座談会のまとめ

今回の座談会を終えて

　司会進行させていただき貴重な経験となりました。皆さんが地域医療に情熱を持ち、一方で将来について模索しながら診療に当たっていると分かりました。地域では人手が限られる状況があり、働き方や勤務形態について検討する必要があると考えています。岩美病院でのコロナ対応も勉強になりました。

　今後もこのような意見交換やアイデア共有の場を継続できれば大変うれしいですし、引き続き力を合わせて県東部の地域医療を支えていきたいと思います。

これから鳥取県で医師として働きたい後輩に向けたメッセージ

　地域医療では特に多職種連携が重要になります。医学だけでなく様々な分野に興味を持つことが重要である、との話題が出ました。患者さんや地域住民の方々とのコミュニケーションにも生かされるので意識していただけたらうれしいです。

　県東部においても医療ニーズは高く、それが自己成長・やりがいにもつながっています。自動車道の整備などで交通も良くなっていますし、その点でも働きやすい県東部での研修・勤務をぜひ検討してください！

井上 直也先生

特集2

地域医療を守る

DOCトリ! 活動日誌

地域医療官として町の健康政策に貢献

県西部の中山間地である大山町の役場には、
他の市町村にはない「地域医療官」という職を担う医師がいる。
町全体の保健・医療・福祉を俯瞰し、住民の健康的な暮らしを
支える役割にやりがいを見出して真摯に向き合う彼の存在は、
町の医療や健康政策に新風を吹き込んでいる。

大山町国民健康保険 大山診療所　所長
大山町健康対策課　地域医療官

井上（いのうえ） 和興（かずおき） 先生

1976年　鳥取県鳥取市生まれ
2001年　自治医科大学医学部医学科 卒業
2001年　鳥取県立中央病院 初期臨床研修医
2003年　国民健康保険智頭病院 内科
2005年　南部町国民健康保険西伯病院 内科
2006年　日野病院組合日野病院 内科
2008年　鳥取大学医学部附属病院
　　第一内科診療科群病態情報内科学分野 後期臨床研修医
2009年　日野病院組合日野病院 内科
2010年　鳥取大学大学院 内科学系研究科 博士課程修了
2010年　社会医療法人仁厚会藤井政雄記念病院 緩和ケア内科
2014年　鳥取大学医学部地域医療学講座 講師
2021年　大山町国民健康保険大山診療所 所長
　　大山町健康対策課 地域医療官（兼務）

【専　門】総合診療／家庭医療
【資格等】総合診療専門医
　　日本プライマリ・ケア連合学会 家庭医療専門医
　　笑顔のコーチングファシリテーター
【趣　味】ガンダム鑑賞／スポーツ観戦

役場と連携し、町を見守る

ある晴れた日の午後、保健福祉センターなわ内の一室に大山町の保健師たちが集まってきた。これから健診受診率向上プロジェクトのミーティングが始まるからだ。その会を中心となって進めるのは、井上和興医師。大山診療所の所長として診療を行いながら、大山町健康対策課所属の地域医療官として、町全体の保健・医療・福祉を見渡し、町民が健康に暮らせるまちづくりの構築について助言指導を行っている。

調査報告から始まったミーティングは、次第に意見交換が活発になり、時々笑い声も起こるほど。「井上先生はいつも笑顔で、相談しやすい。医師の見解を気軽に聞くことができるのはとても助かります。診療所との連携もしやすくなりました」と保健師の皆さん。井上医師も「保健師の皆さんと話していると、町民が今何に困っていて何を望んでいるのか、生活のリアルが聞こえてくるので課題を捉えやすい」と話す。

また、役場職員、保健師や栄養士と顔が見える関係になれたことで、患者のことで困り事があったときに相談しやすくなったとメリットは多方面に及ぶ。「地域の緩和ケアに携わる専門職個々人がスキルアップを図るよりも、お互いに顔が見える関係を築くほうが質が上がる、というデータがあります。そこを目指して取り組んでいます」と目を輝かせる。

▲ 2カ月に1回行われる健診受診率向上プロジェクトのミーティング。話し合いの結果が次の施策につながる。

点ではなく〝面〟で考える

大山町が健康対策課に地域医療官という役職を置いたのは2019年のこと。約10年ぶりに、大山診療所に常勤医が赴任したタイミングだった。竹口大紀町長は「来ていただくからには、地域医療の核として町全体を見てもらいたい、役場職員や専門職と連携して健康政策に関わってもらいたいと思い、この役職を設定しました」と当時を振り返る。

昨年、町議会で脳ドックの助成事業を行うかどうかの議論があった際には、井上医師が予防医療との因果関係を調べ、そのエビデンスを議場で説明したという。「医師自身の言葉は説得力がある。その他にも様々な健康政策に助言していただいており、いい取り組みにつながっている」と、竹口町長はその存在の大きさを語る。

これまで県内各地の地域病院で一患者・一症例と真摯に向き合ってきた井上医師。地域医療官になった今は、「地域医療を〝面〟でみるようになった。ここで起こっていることは他の地域、もしくは日本全体にもつながっているはず。より広い視野で、俯瞰的に捉えられているのも面白いところ」と、新たな気付きがあるようだ。

ワクワクする地域医療へ

大山診療所は鳥取大学家庭医療教育ステーションとして医学生の実習を受け入れており、井上医師はその指導も行っている。加えて、鳥大での講義、地域医療学講座のプロジェクト研究と多忙を極める日々。にもかかわらず、それを感じさせないのは「常に頼れる人を探して助けてもらう」「ワクワクするほうを選択しているだけ」と肩の力が抜けているからだろう。今後の展望を尋ねても、「今が楽しいんですよ。キャリアアップってしないといけないんですかね」と笑い飛ばす。

「若者たちが地域医療にネガティブなイメージを持つのは、我々先輩が楽しんでいる姿を見せられていないから。例えば診療所へ派遣になる後輩に、『お、それは楽しいね』と実感を持って言えるかどうか。自分自身が楽しめないと、住民の方にも伝わりますからね」と井上医師。かといって孤独感、責任の重さを包み隠すわけではなく、それも加味した上で地域医療の魅力をこう語る。「僕の診療のスタンスは、患者さんと一緒に決めていく〝共同〟。そこには創造性が必要で、組み合わせたり新しいものをつくったり。大変だけどやりがいがあります」。

地域の介護職を対象とした講演会の様子。具体事例を挙げながらの説明は分かりやすく、明るい口調も手伝って井上医師の話に皆が引き込まれる。

「地域医療は楽しい」実感を持って次世代へ言えるように。

若手医師REPORT

DOCトリ！のタマゴ

「これから“DOCトリ！”になるぞ」と頑張っている先輩たちに、これまでの歩みや現在の様子を聞いちゃいました！

毎日が新しい学びの積み重ね

鳥取大学医学部附属病院
皮膚科
藤井（ふじい） 楓子（ふうこ） 先生

1996年　鳥取県米子市生まれ
2021年　鳥取大学医学部医学科 卒業
2021年　鳥取県立厚生病院 初期臨床研修医
2023年　鳥取大学医学部附属病院 皮膚科

私は、高校生の時から「将来は鳥取県内で働きたい」と考えており、地域枠で鳥取大学に入学しました。鳥取県立厚生病院で行った初期臨床研修の際はまだ将来の診療科を決めきれていなかったため、3カ月間鳥大病院で出向研修。興味のある診療科を回り、最終的に皮膚科に入局することを決めました。

皮膚科医として始まったばかりでまだまだ分からないことも多いですが、見て触って鑑別診断を考えたり、手術で腫瘍を切除したりと、内科的な側面も外科的な側面もあるのが皮膚科の面白いところ。疾患数が多く、学ぶこともたくさんありますが、その分様々な症例を経験できることも専門領域として学んでいく上での魅力だと思います。

鳥大病院では難しい症例に出合うこともありますが、上級医の先生方に相談しやすい環境であり、毎日新しい学びがあります。これからも一つずつ経験を積み重ねていきたいと思います。

わたしの鳥取LIFE!

友達と集まることでリフレッシュ

休みの日は余裕があれば、大学の同期と予定を合わせて、鳥取県内のカフェで美味しいものを食べながらひたすらおしゃべりするのが好きです。素敵なカフェも多く、毎回調べていろんなカフェを巡るのもとても楽しいです。

幅広く経験しつつ、目指す分野の学びも

鳥取県立厚生病院
初期臨床研修2年目
石原（いしはら） 正太郎（しょうたろう） 先生

1996年　京都府京都市生まれ
2022年　鳥取大学医学部医学科 卒業
2022年　鳥取県立厚生病院 初期臨床研修医

私が鳥取県立厚生病院を研修先に選んだのは、県中部の中核病院として幅広い症例を経験できると考えたからです。実際に軽い風邪から緊急度・重症度の高いものまで多岐にわたる症例を診ています。忙しい日もありますが、研修医は日勤・準夜勤のみなので、体力的に無理のない研修を行うことができています。研修医の数は1学年2～6人と多くないため、上の先生やスタッフの方々に顔を覚えてもらいやすいというのも大きな利点です。

私は感染症などの分野に興味があり、そちらの方面を進路として考えています。保健所での研修も可能なため、公衆衛生的な視点からも感染症診療に関われるのはとても興味深いことだと思います。

学べば学ぶほど分からないことが増えて不安になることもありますが、今のうちにできるだけ多くのことを吸収し、より良い医療を実践できるようになりたいと思います。

わたしの鳥取LIFE!

休日は高原へGO! 美景眺めまったり

なんとなくどこかへ出かけたい気分の休日は、豊かな自然が美しい「大山」や「蒜山（ひるぜん）」へよく行きます。ドライブするもよし、ボーッと景色を眺めるもよし。新緑の「木谷沢渓流」、紅葉に彩られた「鏡ヶ成」は特にオススメですよ。

1度は行くべし！

TOTTORI★イチオシ名鑑

Enjoy Tottori life!

地元の魅力を知り尽くす謎の編集部員「SR」が、観光地とグルメを毎号1カ所ずつご紹介します。せっかくの鳥取LIFE、楽しまなきゃ損ですよ！

遊 @Middle

ネイチャー・サウナ
Nature Sauna

本場・北欧式×緑の大自然 疲れが吹っ飛ぶ鳥取サウナ

今や空前のサウナブーム。“サウナ県”として絶賛売出中の鳥取を代表する施設がコチラ、水着を着て男女一緒に入るスタイルの本格的フィンランド式サウナです。サウナ室中央にはサウナストーンが。水をかけてロウリュすればジュワ～ッと蒸気と熱が立ち上り、一気に汗が噴き出します！

大山滝のかけ流し水風呂でクールダウンしたら、インフィニティチェアに身をゆだねて外気浴。名峰大山の東麓にあるキャンプ場の一角だけに、緑の森と鳥の声に包まれながら“ととのう”感覚が味わえちゃいますよ。

住 東伯郡琴浦町野井倉688-130 一向平キャンプ場内
☎ 0858-57-2100
営 月曜日／10:00～17:00　木曜日／13:00～17:00
　金・土曜日／10:00～20:00　日曜日／9:00～17:00
休 火・水曜日、冬季休業12/20～3/16
¥ 1回 1,000円　P あり（無料）
山陰道琴浦東ICから車で約30分
※水着をご持参ください。

食 @Eastern

港カフェ

海と潮風とバーガーとオシャレに味わう港町グルメ

▲左：IWAMI BLUEサイダー 400円
右：ホタルイカバーガー 750円

住 岩美郡岩美町大谷2182
☎ 0857-73-1212（山陰松島遊覧）
営 9：00～15：30（LO15：00）
休 冬季休業あり ※詳細はHPをご確認ください。
P あり（無料）　山陰近畿道大谷ICから車で約5分

昨年夏、浦富海岸遊覧船のりば隣に新しいカフェが誕生しました。港町とあって、フードメニューは地元で水揚げされる魚介がメイン。その中でひときわ目を引くのが、珍しいホタルイカのバーガーです。

イカ墨入りの真っ黒なバンズに、10匹以上のホタルイカを包み込んだフライとイカ尽くしで、プリプリ食感とワタのほろ苦い旨味がたまりません。上にかかるタルタルソースは鳥取砂丘らっきょうの程よい酸味がアクセントになっていて、フライにベストマッチ。岩美の海の色を再現したサイダーと一緒にどうぞ♪